

特別
イ 4
3163
48



都初春

初春
祝道

早春開

開
早春

未凡
氷解

子日

震中
子日

子日友

門あきしうらむ移きてねよふ平世及びやふ

と二はふ道こふなれ清后も春侍九ふせこの意

あまの春のまよ明くも雪も戸はらぬ開のかうい路

唯はとて秋葉一春の流るる開のまはる雪のしづ

唯はとて春のまよわぬ雪も戸はらぬ開のたひし

唯初て長葉よむわらう氷あけけのはる花の春ぬ

十のこの花をよ松のまよ日々ふらも雪は春にふせ

子日あてはる神やあはうし霞をよふや日の松を

年毎の子りけあふ春をあはうも松のこのまよ友

子日信真

霞初雪

山霞

山霞
山霞

山霞
山霞

山霞
山霞

山霞
山霞

山霞

連峰

唯をそきくしよふに松の色を雪まのまよわうし

春のまよの初雪のしる初霞をよはらうむのまよ

日の光をよあはうし霞をよふや日の松を

しよとあはうし霞をよふや日の松をよはらうむのまよ

雪はあはうし霞をよふや日の松をよはらうむのまよ

かまはうし霞をよふや日の松をよはらうむのまよ

霞はあはうし霞をよふや日の松をよはらうむのまよ

春のまよを今別えを初て霞をよふや日の松を

春のまよを今別えを初て霞をよふや日の松を

おしんたし海はふらりし海はふらりし海はふらりし海はふらりし

野宮の霞

うきと海よりうき霞のうきえのゆく海の色をたす

橋の霞

ひらぬのうきとてうき霞のうきえのゆく海の色をたす

立後海末の緑の海の色をたす天の橋のうき

江上の霞

水邊れてゆく春のうきとてうき霞のうきえのゆく海の色をたす

川の霞

桜川名も所海の初花もすも霞の色をたす

水の上の霞はうきとてうき霞のうきえのゆく海の色をたす

海上の霞

ましまらりし霞のうきとてうき霞のうきえのゆく海の色をたす

湖上の霞

ましまらりし霞のうきとてうき霞のうきえのゆく海の色をたす

浦の霞

浦をたす霞の色をたす

霞の浦

いほりえのうきとてうき霞のうきえのゆく海の色をたす

ましまらりし霞の色をたす

霞の浦

遠くともうき霞の色をたす

霞の浦

浦をたす霞の色をたす

漁火のほろりし霞の色をたす

霞の浦

谷のうきとてうき霞の色をたす

堀本のうきとてうき霞の色をたす

南枝暖
竹堂

神堂

旧堂堂

遠堂

暖堂堂

夕堂

浦堂

冷堂

中車堂

山家堂

南枝暖の影もけし東梅枝の雪清きいよけ堂の声

初春子鳴堂の雪清き谷もわし一草一木なほ

いはれそと古堂はくふたの書れ使と侍を堂もかく

宿りともよりの之枝の花あけり霞ふさぐる堂の声

影のよむ枝の月影のめよとのれはやなふ堂乃こも

庭くらしと静け白ひて堂の本傳ふ梅も夕ぬらや

高松の春几遠くはゆれとわすむ屋上のくくひの戸

五月清方よあつて橋の小橋の春より葉の鳴る

先笑ふ花の中守とよ宿の思伝はらりよ名乗る堂

暖てちふ花さうよ宿の宿りぬ春あわすれと宿のくひ

山家堂の堂せの春よききせもやまひよよそをく

異竹の篠々るるを中垣よあつて歸て也堂のこも

千世の春ならぬ銀の異竹は篠々るるを也堂のなく

雪清の枝は清くして堂の鳴るをくふ春の異竹

起休のわらわぬぬや異竹よねくちる宿の堂の

堂の聲もとらけはく花の雪はむかへ也堂の梅のえ

花まふ春をもくはは言の葉の色よと音もも堂の

小松系おはし世をやならぬむ神子の世まする堂

鎌倉
竹堂

竹堂

竹堂堂

竹堂

竹堂

竹堂

竹堂

梅嶺春

若木梅

梅風

一葉風

霞中

曉

けしきもあはれ春の春きて神のまはる梅の下は
 わたり足心の春も世せし若木の梅の花は
 今年より春をとりあはれ梅も心とあはれ梅う
 らまはるはそいまは梅の花は軒窓もあまら
 らまはるはそいまは梅うとあはれ送は神の追風
 いまの風をいせぬ新緑のたよりあはれ梅う
 神垣のしそも一葉もむとあはれ梅う
 春寒もあはれ人の雲のたより梅うあはれ梅の窓
 霧のよむ日をもあはれ梅うあはれ梅の窓

夜梅

一葉夜風

梅花
夜意

山嶺
梅花

梅後水

昔夕路ふそこの花の春ぬよ夜の神の梅はあはれ
 梅ういそこの花の春ぬよ夜の神の梅はあはれ
 初夜風はあはれ梅うあはれ梅の窓
 園の戸の窓は夜ふくはあはれ梅うあはれ梅
 何かにあはれ梅うあはれ梅の窓
 常の春くはあはれ梅うあはれ梅の窓
 身もあはれ梅の窓はあはれ梅の窓
 白の春もあはれ梅の窓はあはれ梅の窓
 梅の窓はあはれ梅の窓はあはれ梅の窓

津梅

里梅

簾

戸外

紅

柳

はく梅の花のかけ下おいらさう白の刺とせう先
羅は津やじうの花の春風い今そ言茶の白ひくは
とくはそれの白い里もは梅はくはの羅は津の春
はく梅の宿とけいさう志んせよ泊旅の里もは春凡
ちも春もいさよち梅とつ山梅の初梅の春はけ梅え
まきさうと誰とけと春寒ま山梅戸の梅白ふむ
日なやま公堂ふまねてままられ白ふさうの梅の春
梅ののこも春もさ柳はく花白のちとんは
はく梅ののこも春のすく長は日さうなひ春柳

柳色春

同兼
楊柳辺

柳葉露

路柳

ひ路

橋田

水邊
古柳

心とあまじ柳やお糸にさ花も木のめ春をさ
色はて花田の春は梅もは凡のこちとなひく春柳
別れたれとけやさ春柳の緑は春のまはるは
くは春やさうさう色もは道のひさく春柳
川はひ路の糸の長さるふ柳の木陰道もいさ
花えまはち道の休いふさ春は春柳の陰
ひさ春のさうさ春は春柳の緑をさうはひ路
水邊はひさ春の古柳はひ路 影もは春はひ路
河原のち一本の柳はひさ春はひ路

古柳 春をきてまことの緑は深し 柳の糸や 枝のまをい 春

柳の糸 年々心柳の糸の若緑 春を交なるとも かしこし

若草 西なほし道の色もふく 草の若葉すく ぬる春の露

道の色 道の緑はつく 春の色に 草をぬれ 露とまをい

故々 古里の雪まじまじ 下宿も若し 露とまをい 春の若草

草の青 畑をふく 柳の色をまじり 若葉のふく ぬる春の露

坂の春 坂の春は 柳の糸をまじり 草の緑は ぬる春の露

まをい 春の色や ぬる春の露 柳の糸をまじり 春の若草

雪の夜 雪の夜も 春の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

早蕨 此のまをい 春の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

春の月 薄くう 露の月の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

春の夜 春の夜のまをい 春の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

春の露 春の露も 春の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

春の鳥 春の鳥の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

春の月 春の月も 春の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

春の露 春の露も 春の色をまじり 柳の糸をまじり 春の若草

江春月 かすむ江の月之難波のそとにけり春のきつてこれ影を思深き
江上へ 春の夜に空のこぼれきて入里の仲ならにほよのさむ月影

故に 春の夜に東の月早懸に霞の水はな影よこまて
人よもさ里にむしりの春のこめてかすむ江の影よこまて

春曙

花鳥の色もあはれ春の光もあはれ地鳴りのそ
日雪のおもひにけふなるあはれさむや春の海風の
鶯の羽の舞も梅のほのふきむ春の鳴りの
はなむしり空の雲の毒柳の色もあはれさむはな鳴りの
都に ちよとあはれさむの山極都の春のわけたのそ

雨巾

春曙

都に 雨巾のれ者には津の八重霞世を満るは春乃明りの
春もさる雪の富士のほのぼのくと霞てあはれさむ松原
我里の春のほのふきむ極中さむさむ鳴りのそ

春雨

知に

春の雨もせまて落つるおのの雪のこかたまやふ
降もは雨のふりぬるし雨乃思はあはれさむはの雨影
思はれまはれこの草の色をわきて本朝降もむは春雨の色

節に

知に

生おは緑の後さる春のよきとさるはれさむ春雨の色

春前

栗のこけ落しとて露も雨もつらむ春の志は
雨のしむれの水もまじりて春の春乃静かに
葉のたひかすに清くはれし春静かに春前
帰鷹 恨みよ思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
春のまじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の

月前

かすむとて思ひや捨る春の夜の月を
秋路よはれし水や春の都をさすよ思ふ
月まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の

清夜

秋路よはれし水や春の都をさすよ思ふ
月まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の

深夜

嶺

阪府 城者

思ひはれし水や春の都をさすよ思ふ
月まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の
まじりて思ふよはるか秋路よ待む春の一人の

春前

似字

春前

野確 雲を度こまきふ落ふ夕雲産床の霞のいつたあむ
雲産 中を度こまきふ落ふ夕雲産床の霞のいつたあむ

田こ 田こ 田こ 田こ 田こ 田こ 田こ 田こ 田こ 田こ

山中橋 日暮りほそものしのかと夜まきの花のいろよれむ
苑 惠也とてほろふ神の春の色をよんで出所の花よれむ

待花 山まとの花のうらみかきやして梅よこまふ入あいの舞
雨申待花 待えてー花よれと見ゆる降雨のいろよれほよ枝の白雲
見花 馬えくの思ふの山橋岩根傳ひも花よれと見

初花 日新は次行枝なりて立雲の色青くはふらゆの如く
 花盛 桜色の霞を四方の春うけて花の立中の九寸のうら
 花影盛 碧あけぬ月のは生の中やふ枝は花のおもたせ
 夏花 あかほろ花を心を除きほほ日ぬき春のおまふ
 月雪と尺やいまの心色も青く花の影ふふの心
 おまふ花も花もあまのめわけて笑ふ色のかちと
 尺盛花 西風を忘れて尺はも今日女口はるやとせ花の木の
 心解 尺、 也山よ心はらへて世をりて石よ花の春もあうぬ
 花 春をうてわかれと尺は桜花のゆき色の香あふ

交花 今日またおれ桜の心なきて、こころなき花の——の
 立まふ木乃の神も傷色の霞より白く花の下にけ
 花未飽 ちも音もあう色は春あまおまふ中と花の心
 花もほそあわらひのいろなれまらうと春をい
 花春友 長おれは春の心もいひまふ花をうけ
 花他友 花尺もほそ色友まわくう花葉も心やおれ木の
 花如舊 あうまほ花の色高きう年とまふ木の春もい
 百里を春の心これ桜花もじうの心をち
 富の春もほそわけても花もいふ女のねうひり

花下
 志帰

依花
侍人

花留人

春色

、為
住金味

滞
思花

花
不用

雨
中花

かたはちをきねしと世の柄の山崎もこの花の下流

かたはち今りしふるは梅は夕風ひいて花よりふ

梅枝をこの雨の初もさかてふ心あり梅の花の

色あり水子ぬの山の梅花は曇りあり春のふ

はるは梅の枝にさかるとも春のま枝の使をかき

あく梅の思ひいゆきてる花は露をこの春の山の

春世の花のふと今もあふるもは花のをみりて

春雨の雪のぬれは山梅のゆらゆらと色くこの

梅もあきと梅の枝をわいて花は雨の春雨の

雨
後花

噴
花

噴
花

娘
花

咲ちあつ心の雨より枝の花をさかして白く娘は

一すちいといえしとえし白梅の花はわかれふ山

まのりて噴花を枝をさかして花のまのり

月は花をさかして娘の枝の花の色はけき

一夜露の花の下流噴花をさかして白く娘は

梅はくもあつ心の山の花はわかれふ山

初春の花の白雪をさかして白く娘は

まのりも後流をさかして白く娘は

今朝もあつ心の梅はけきの色をさかして

今朝もあつ心の梅はけきの色をさかして

澤山花
遠山花

外のちほほを盛の陣せらるる花の色りもよき
瑞ふくえほた遠ぶ山鳥の屋上の梅雪のわたり

山花

早らもよほりて山梅高根の遠乃花はわけて
はく花の指やしはれ山の雲林の雪とこより

志賀山花

甲と見一花ごうの山梅むし高ぶる花を美代の春
はく後のまらほ花も春はよ花もよの志賀の山花

杜花
野花

あはも来て又きまれば花の色よ心をさむは夜よの杜
草よはるに今日計とがた夜よらちよしやの花のよ花
はくのとよほ花とこれ種てや東の梅花よはくむ

閑花

あはゆ閑の舟山の花盛都の春をたさくうんは
まらもよほりて花の色よ心をさむは夜よの杜

花は水

静かな花吹雪をて地水のほく波ゆるかすむ春風
静かな花吹雪をて地水のほく波ゆるかすむ春風

湖上花

湖の水よまじや岩よ吹かそあはる花のよ花のよ花
あかの浦江の花の咲ははく波うそてよほよ春を

故郷花

山梅てなほはくの花の法はくうほほ志賀の山
春はけ忘れはく花のそれかかき色よ美あはる白雲の

色も青もありあはる志賀の山梅花よ都の花をさゆむ

ぬく

任人のあけもあけ若の花はひらけまき春の夕れ

後宿花

夢より後宿の床の山桜花のあけし花はよのけ

花情

陰高よ大田山の桜花枯る雪の春よこまの光

花枝

あうけ尺でふれまほふ枝の花ははきぬよ春の

初よて尺一ちよも様もねて心をとしは花のつれ山守

花匂

やめぬのえ羅里まてうあふれん木のゆきと花の匂を

あつたまし心はくやうむ枝花の春の香

桜花枯るかゆむ春ののほろぬちよよ春のほろし

花色

路帯よ色むね花の色といさあけし桜の名をやらん

雲霞まきるに色をよせてあけの桜咲中あけし

梅は花

桜枝かゆりの花の香をりてふはさき送る春のこころ

花梅枝

山守の心の色をりてふはさき送る春のこころ

花麻

佐保原の春のさゆの山はゆはゆとふて花の散るふ

花綿

唐綿春の白糸のきくねまきも都花の折よあふと

花雨

路帯よ色むね花の色といさあけし桜の名をやらん

花雪

あ鳥もゆきおもふはまきふ山凡の花の雪はよ

寄花夢

桜花うけぬい花はゆき現る夢よゆきぬ色香

現ももまゝに又も花を思ひ麻の蔓を踏くはなごころの
情花・わらわを頼み心を散花のひまはくあはれ目の春春見

散花もも尺すい中くあつれくの心はくはなをりしを
春をてあつれ色の花もあつれ心を添くはけん

花

散うみりあはれもも中中の雪れくはなをりしを

花

あはれあはれ花もまをて候ても風のあつれくはなを

花

雪れくはなをりしを中も花もあつれくはなをりしを

散花のまをりしを中も花もあつれくはなをりしを

花

言の葉もあつれくはなをりしを中も花もあつれくはなをりしを

花

かたさのふく衣散花の白いさるともあはれくはなを

花

今りもあつれくはなをりしを中も花もあつれくはなをりしを

散と尺一花の袖雪今りあり積き候はなをりしを

庭橋も花の外の苦みもあつれくはなをりしを

花

山吹の移り候はなをりしを中も花もあつれくはなをりしを

春

かたさのふく衣散花の白いさるともあはれくはなを

候もも候もあつれくはなをりしを中も花もあつれくはなをりしを

花

梅枝の袖の雪ゆふあつて長きり散花をりしを

花

散あはれくはなをりしを中も花もあつれくはなをりしを

春日道

宮人のかはは梅の花をきき日く〜あらはこまが

中やよふふあよまき春の日は雲をわらふ影のふとけさ

三月一日

春の葉はのほ〜りふさのほつて火くふ梅の下木

はく花もほすの今りのおまあひてあひをよむほそく

桃花

山をよふ〜む〜むむむむむむむむむむむむむむむむ

賞桃

唐大和のほふふふふふふふふふふふふふふふふ

夕桃

夕霞のふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜

梨

里遠き娘の垣根の春の色ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜

鶯を寄

け鷹のあ〜さ〜送〜は〜こ〜次〜の〜よ〜意〜い〜な〜れ〜て〜い〜は〜の〜来〜ぬ〜

陸葉

し女子のあ〜ふ〜春〜也〜の〜ほ〜不〜定〜は〜む〜神〜あ〜る〜て〜花〜う〜ら〜る〜

朝葉

桜持朝のゆ〜ゆ〜の〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜

夕葉葉

夕霞のよ〜色〜あ〜ふ〜ゆ〜の〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜葉〜

蛙

前代の〜これ〜くら〜も〜あ〜と〜群〜い〜そ〜蛙〜や〜春〜の〜山〜田〜の〜い〜え〜

山次の下ら水よあえて井の蛙のまゝ群はなく

夕

夕日影のま〜ま〜ま〜ま〜の〜草〜か〜れ〜あ〜こ〜も〜わ〜ら〜ん〜だ〜蛙〜か〜く〜れ〜

田

今日まをい〜か〜は〜ぬ〜山〜田〜の〜草〜か〜れ〜あ〜こ〜も〜わ〜ら〜ん〜だ〜蛙〜か〜く〜れ〜

河

散花をあ〜む〜蛙〜の〜昔〜跡〜の〜よ〜ま〜〜ぬ〜水〜の〜春〜ふ〜鳴〜え〜

娘

山次の早娘の蛙とののま〜と〜若〜枝〜は〜浮〜遊〜び〜た〜ゆ〜く〜

徳幸函

苗代

鳴哇まきまきとよきやに花もよるせの水うらげ
 水見ほむ山向の地をのつるもちの草からぬわとも
 春の園をさくすくも豊田は年の越すは梅のなごり
 けしはるかや田の西を待たると先程を以て苗代の水
 せしすより梅のこのことかたて先水はまは家殿の
 あせはよ水の流れをせよ入て流う種まも山田の苗代
 小山田の道のかたをり川の使やまよる次苗代乃水
 志保の山に山陸の岩はく花もきくはのちまはく
 雲のうははれぬ殿の春のいけて岩根の流し色よいて

詠
脚端

仕若

歌

修あてあつぬ山路の若はくまは葉と向陽もよ物あり
 花よるは他のけのはる録の若葉春をよちの光る
 花よかよよをよは他のは若藤はく岩の花よはくし
 ちりりぬ山道まのたふれてこころも春は山吹の花
 玉向や若くも流れてし水よ花の歌せく春の山を
 伏澤谷の柳桜の衣の色をよきてはく山吹の花
 春もつるまよは雲の色もよ花根はまの山吹の花
 ちかむれよ都の花をの枝に并のら吹くよよ花も
 花よ世は胡蝶の夢の朝よふんあふえてお花の吹

花標の花のなまこしよき花標一しよめていしよの花
夕歌を
これとよもすこころえれ苗の垣根えぬしよ山吹の花
うらばしよとそいえこころ山吹の花さき里のまの相橋
山は根もと山は根をたて山吹の花をやちよ井のつぼ
山吹の花の名よおふ流れといはよよき流一井のつぼ何
流れは春の口なまこ山吹のをもよき流一井のつぼ何
流れは春の口なまこ山吹のをもよき流一井のつぼ何
をいへてえぬしよ松の花の春を常盤よ咲ちよら
むしよきのやまこしよ松の花の春を常盤よ咲ちよら
ま子世の春を咲て花の松の緑よ咲かよら

友松樹花

思藤

まいりうらこしよ松の上よ色わく春の花のよまは
思のや花も木高く咲ちよこの流のつぼとつぼ
下はし流よ花の春ありて流咲こしよ松のつぼ
夕よ人の色もまはりて流はら思の松よ入り流
春は流信よそりて松花よのよ流の浦凡る流
まのつぼとつぼ思の流のちよまありしよ流の指せ
おはよきて春せの流やちよ流の流ほよこ流こしよ流
軒やまほふ松よおしよ松のたよまよちよ流の流
流よ山よまよ流の流うらまよけこしよ流をよまよ

友花
始流

廊

江藤

流

流

春はく色よ心といはれてあまらふむ多功の浦藤

友風 風よ又席くこの痛の花心松をたよ牛とまよのじえのか

暮春 花散て思れは水の鏡も春の月夜のうたをを

散花しとまよ水の色をせらる春の月夜不測女は

川より春の名波の彩がー泳ぐも来乃う伝入月

雲 以春よま物色も又花のお毛彩海せ山年の白雪

花 春の名しとつを色香といふせじあすもえ白の花は

藤 いろも春のわかれも紫藤の花は柳の枝なりすを

鳥 心あれや花はよもなもかたわて春のころをほく

こ 水より花の影をくまらる春乃うれ

行春を思ひく送は舟は舟渡毛く吹うはむ

花鳥の色もよはるとまよ舟渡わられむ

ををりて思おもさるれすよふぬり花の影を

やめえーしたのちひは春毎のおれ別をさる

花鳥も今春程の色もをの海舟の来の春よめ

花鳥も今春程の色もをの海舟の来の春よめ

今日のころ日暮ふかよはれせ山とまよの春を

春よ来也ちりて足家そのゆきまよとも

舟中 昔春

兼情春

留春 不駐

残春

海春

三月

春 盛陽和

雪消
山を静

吳竹の基の雪消うまめの名うま梅壺の春
雪消の積の露をみて松は和しく少年の春風
春のるを雪のふ神雪降てあすの緑の大乃のく山

松花
春末早

春別
笑語中

此後
迎春

春情
多

迎春
祝世

松柳
後化水

こまの雨と風とくはせりかを部く春のちまがら
し女子のほろあつし世の春の文に春にがのちあはる
遠との何れの宿も春めくを春の恵のけいふに
道一あまの世のほろあつし春のわなは代の貴の
たごもふ春の若松青柳のよもくは春の池水

椿原
久

堂元
笑百春

春日

春海

春池

春鳥

春河原

春後

春衣

も椿原に春の言の葉の空の春八十年の春
糸代の春を空の言の葉の空の春の春の春の春
のやまはもまの春の春の春の春の春の春の春
のやまはもまの春の春の春の春の春の春の春
臨寛の柳も春の春の春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春の春の春の春の春の春
河原の春の春の春の春の春の春の春の春の春の春
山の春の春の春の春の春の春の春の春の春の春
蝶鳥を春の春の春の春の春の春の春の春の春の春

研子 吹雪も射るのほろほろの様う春を心うけて春よあひ
中春 け下のわんごふはくろく甲路を相成春の中を
春日祭 花魁をけふは春の沖物けふ鳥井の麓の陰よふふ
石清水 陸山祭 甲山けふはく春よ春人のあひの元ををわや

冷泉三御心歌

夏

宵夏 神路山宮井あふふの来たるは祭壇みまうの陰
と藤 花の豊にふふ福也とも春の始よの色をなつれぬ
更衣 ぬふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
こ懐春 暮よ今知れぬかめ花衣の心春にわすれ
細雲衣 花衣あれや寐ての朝まよふぬふふふふふふふふふふ

今朝も、猶花深の春の袖も、あつてさうな夜も、
 せきうも、神のわかれの顔も、あつた日の花も、はな
花の香、心白の春の衣、くまの、はの、は、は、は、は、
 夏来、て、花の、花田の、袖と、又、あつて、咲、け、も、
 花、山、の、木、か、つ、れ、は、く、ま、様、青、紫、の、枝、の、花、も、ま、れ、る、
 花、の、ち、は、の、ち、あ、ら、わ、れ、て、様、花、ま、さ、ふ、し、山、の、う、も、こ、う、
梅、枝、い、を、を、つ、つ、の、杜、の、ち、ち、一、木、様、の、笑、み、は、
 い、う、か、い、は、い、の、ま、様、青、紫、の、お、く、の、ま、れ、の、色、香、を
 若、緑、も、は、中、よ、と、の、花、や、枝、さ、か、り、似、楓、の、し、え、木

思、
 雲、霜、の、枝、も、ま、も、ま、ぬ、ら、の、お、紫、の、帆、を、る、あ、く、
 薄、く、こ、う、青、紫、よ、う、て、若、登、木、も、お、木、も、な、ま、様、枝、
 你、緑、松、い、も、ま、は、思、の、よ、若、紫、解、り、く、あ、う、と、お、
 吹、凡、は、藤、も、涼、思、の、小、木、く、の、梢、の、こ、や、ま、
 う、片、志、を、は、言、紫、の、垣、下、こ、か、こ、色、な、た、を、咲、も、
 雲、よ、あ、よ、月、の、花、め、と、卯、花、の、ま、よ、の、こ、あ、ち、
 神、糸、は、卯、月、の、花、の、ゆ、ふ、う、う、の、ま、咲、た、
 花、の、名、の、こ、も、世、陽、は、る、垣、根、も、道、を、く、
 山、枝、の、籬、の、卯、本、ら、妙、の、花、の、ま、う、め、ハ、布、う、と、
 見、
 公、籬、
 公、籬、
 公、籬、

葵

かれせぬ松尾山のちみ草かしの糸よこちもちふは

年毎

のうものまねあひい草束世をうてかたれぬ飯

神奈

伊月のもふあひ草たのまをうてけりす諸人

都

をどかぬふ月の中まの時をたねおほく夜まの二群

百千かこ鳴や五日と帯わけてはよあかしのうた

一群も思ひいふをそ文教の難の若よましくおほき次

星な向く女月と末のけ鳥かま地群をあやしいおれ

去年とかくはれかうとと思ふよとけ待とやと都と

け鳥初きすはけの宿軍とむてえとよこちとよこち

初

春なうむとの初をもけ鳥心のまほなむこつれてやなく

初

との言のあふまらすと誰やよとけあめての鳴け

雲

まね出群とあれこのけ鳥中宮のほよむのひとくま

雲

け鳥たれも高根の横電よわうねてなのふ唄のあ

音

はふり向く白ひをいはれ時鳥来鳴音音のあやめ之元

噴

思ひはあねあの子よけをうたをいふあつた

夕

一舞の中しくはるふけを待たれこのうた

一

等閑子あもいれいやはあまき一初ますまの二群

一

け鳥待つていふと誰かて星をいふねもあもあ

郭と函

卯花の咲けさうはさ里こして鳴けを群はる次路
人のぬきまはほしほまけ鳥はのこ月のをれはうら

山

け鳥居かられのあにねまはし里子出てたふれむ

目

男の追乃松はかたはけ鳥居をうまはけゆらとて

仕

少ふ全群をゆまけ鳥居いゆのまじのいくばもたけ

脚

あや草白くはけ鳥居のけ鳥居かまぬの夢もむさそそきく

閑

閑のとの山け鳥居あうもたのこしてさほ噴乃ここ

浦

友達のあそとよけ鳥居うらけりむ多胡のうら

海

け鳥居春とをちの海りきと舟けりとりてあま雲え

里

初音をやちほけりむけ鳥居もあはれとの山えと乃里

卯

け鳥居卯花頭の方月まきをむらむのこのあふ群

市

け鳥居や市人あふれぶものあふの今日の群

山

け鳥居うらふらけりあはれけ鳥居都よあ人えことあま

山

かま入山をまはれけ鳥居都よあ人えことあま

夢

け鳥居うらふらけりあはれけ鳥居都よあ人えことあま

夢

け鳥居うらふらけりあはれけ鳥居都よあ人えことあま

夢

け鳥居うらふらけりあはれけ鳥居都よあ人えことあま

稀

け鳥居うらふらけりあはれけ鳥居都よあ人えことあま

早苗

あの草のたれは軒邊をかれたなしはきうとく盛る
種とそのととけよほく若苗におくてわさ回の色もあるを
柵の間の日をて残うたとも早苗の外の火草をもて
草高を思ひをからうて極度を中の早苗の草を思ひ
氏のしよ丁所の早苗ともくは田家の肩も豊々ルー
めもないも也れは草木も也れも色の早苗にほく十回の末
一とくと及ゆきあいの方苗を幾干所田まうたらまし
田家をいちたふ門回はちとまき祈祥候う早苗とも
かれ廿五月のうふのあやの草十世の何もからきあし

高蒲

わやり草かきしめたく無びとハ誰もこふの花ももういは
菰のかはもと清くよくすのやのあやのをわるは草の初風
今日かく侍社のあやにはの世風をのせはふふいたらん
昔とわるは茶未魔をて鈴意のかのあやもうたらん

恙風

初風

朝に
雨路かくないも涼いやり草ちよく初風も初風
うるかい雨屋こて此の竹のあやり色うすてを
此の水のおくまくはあやり草かくて今夜の柵もまして
此の子も鳥もあやりの草を初めの初風の家かすて
此の水のあやりもこくも初風もかくてもうのおをからん

水田

地

地

地

袖草履

あやう草履したる髪をかき初て今日一し神のまはり

神上

あけとほへうそしゆたさし神ふふしすあやうの後の

橋

白守に枝すあやうとて花橋のつぎやすま

橋の陰もじ道よゆらり言葉の林もあやうの

橋のあつ風よまらんとて花橋のつぎやすま

梅のついで一もあやうとて花橋のつぎやすま

軒そく花咲くも吹風も橋のつぎやすま

橋凡

うはとさうせよのゆも橋のつぎやすま

雨

立也雨まの京も橋乃白いあやうの雨

閑道橋

宿あれは別夕日のかげをせし誰してん

白くして誰えとて橋の陰もじ道よゆらり

花橋

あつ草かたは神のつぎやすま

花橋

又もては花のつぎやすま

又もては花のつぎやすま

花橋

橋よ言の陰あつてこゝはんとて

花橋

花のつぎやすま

花橋

花のつぎやすま

花橋

花のつぎやすま

標 誰家 院よりてほゆかれと標はくころと山城の若もゆき
 五月雨 やく若てまよころ畑は五月雨の雨まよらふ世の夜
 五月雨 かよりのし院し五月の夕もとなつら晴せば有明のら
 山、い かなく〜煙し雨もる〜わの次は山の上の五月雨のこや
 社、い 甲南の山うら田の社のうら纏打ら〜ほむ五月雨の
 思、い 晴らぬま雨さす枝よあまゆと信田の社の五月雨の
 思、い 懐人の社をかき〜雲をさゆ〜の思る五月雨のころ
 海、い 五月雨のちほの飯つぬ水ま〜信はゆ〜ゆ〜
 飯、い 五月雨の若もをほ宿いほ〜と〜のあ〜と〜と〜

水鷄

夏月

水也

ね底をばよまよせてほ〜これ幸ももほやの五月雨の
 きの門ををほま〜し〜し〜水鷄い〜く名もよむ
 こ〜ふ〜い〜うき捨てるはの戸のよちよ水鷄のをさ〜ん
 秋ま〜して〜も〜今〜を〜斗〜袖〜涼〜し〜を〜夜〜か〜の〜月
 侍玉は本乃上風も吹ゆてま思新す〜夜の月の
 か〜せ〜方〜い〜て〜宵〜の〜ま〜の〜ま〜よ〜て〜月〜ま〜を〜お〜な〜の〜け〜し〜
 ま〜宵〜の〜月〜の〜端〜花〜の〜う〜ら〜は〜雨〜は〜係〜新〜ゆ〜め〜ら〜
 宵のま〜夜あつ〜し〜ま〜新〜地〜は〜雨〜そ〜新〜く〜月〜の〜涼〜さ〜
 涼さ〜あ〜て〜夜〜わ〜ら〜舟〜の〜早〜く〜月〜の〜涼〜さ〜し〜

竹亭
五月

竹石

明佳者

此の如きをまじりて差竹の夜以すし一と客の月影
 月のまほさの差竹吹ぬよおちぬ吹流し尽てすし
 差竹の小枝糸をまほ月の影をすし一と客の小夜風
 の香のの難の花のまよふ来てこころも言ふ大和きてこ
 こむ枝の色香もあれを梅子の空ねをう花の干粒とま
 玉やあの花の色もあはして朝日竹吹垣根色よほちて花
 とあはれ也花の色もあはして朝日竹吹垣根色よほちて花
 文草の垣根のまよふ花をよほちて花
 友ゆき草のまよふ花をよほちて花

野

中

下をえをえしおし新いまのやのさきま高き薄きや
 吹笛の音汁してあまきまのまほちいほに野の友草
 香もまよふ花のまよふ花をよほちて花
 摘葉のまよふ花のまよふ花をよほちて花
 色もまよふ花のまよふ花をよほちて花
 夕日影のまよふ花のまよふ花をよほちて花
 このまよふ花のまよふ花をよほちて花
 丹月山月清きまのまよふ花のまよふ花をよほちて花
 五月山とまよふ花のまよふ花をよほちて花

草也
思射

連衣 照射
橋川

津波よわくそそ夜の花をまきこころぬきよき
夕のまじりの煙を初てうきを浪のうきを洋へ
六井のまれの粉鏡うるあつちを焚きつゝ下向じ
うらめしき鏡にうらめしきをこころぬきよき
大井のうらめしきうらめしきうらめしき
船くしはここの船を焚きよき
船のうらめしき船のうらめしき
山島に月を帰つては焚きよき
傳はしよき船のうらめしき

粉舟夕
山陰

堂

うらめしき舟の早よ焚きよき
水舟のうらめしき舟のうらめしき
うらめしき舟のうらめしき
おきよき舟のうらめしき
村のうらめしき舟のうらめしき
思いあきよき舟のうらめしき
風わく舟のうらめしき
もを焚きよき舟のうらめしき
里後舟のうらめしき

夜、
昭春
橋堂
堂大
休、
は、

浦島 わかりの思ひをなれも浦島の瀬にあはれて雨をこ
富、 暮涼の思ひを思へてを覚ゆるはるはれは
蕭瑟、 夜風く吹くはるはれは草の頭を吹くはるはれ
似玉、 あと又てをうりてこれに涼しきまはるはれの思ひを
水清く流るの思ひをうりてこれに涼しきまはるはれの思ひを
夕氣、 けうの思ひをうりてこれに涼しきまはるはれの思ひを
燐火、 あやうく燃ゆるはるはれに涼しきまはるはれの思ひを
星、 あやうく燃ゆるはるはれに涼しきまはるはれの思ひを

雨夜、 夕煙をうりてこれに涼しきまはるはれの思ひを
地蓮、 花の思ひをうりてこれに涼しきまはるはれの思ひを
氷室、 あやうく燃ゆるはるはれに涼しきまはるはれの思ひを
暮、 あやうく燃ゆるはるはれに涼しきまはるはれの思ひを
夕立、 あやうく燃ゆるはるはれに涼しきまはるはれの思ひを

夕立 早と 鳴神も遠く多めの山隈に虹がて初とあつて
山々 以詰 ねとまへー雲もゆるみあつてあつた夕立の雲のちりき

何々 泉の夕立雨の雲井も物まけちの雨後のさう
凌々 舟人にもなく凌の波風もゆるぎをわけてきほよ夕立

核々 雨は 中記し峰の林も鳴蟬や青い雨乃声 秋もむじ

林の 鳴蟬 花白紫のちりきを中蟬や青紫のあまの音を鳴え

所辺蟬 鳴蟬の音も涼とよまの木の音も是ゆゆ所の音も糸

馬と 蟬 助とめてまは本流の材もとられうとまう不蟬の音も

掛法蟬 木がれし雨ふ雨口の竹吹流といふもよ(也蟬や鳴

音 一しらの雲々林の本もなぬもえ吹をらあ蟬の音も

月と 雲をわけて雲をほ(なぬ吹流の色も清く

園中 二地盤の風をわけてもあまの音も白くも音の色

象 しいあはき園もまのぼるせえなハ蟬が音もあ

山石の音もあまの音もあつてあつた音もあつた音もあ

水音

細京

こ凡

榊

榊

船

榊

杜友枝

荒和後

六月後

等守の心輝のえ出の陰言てまのつらぬる言ふしにふ

涼さといはれぬ好の者ぬしはるの舟水はこころ小筑

身をきて侍向まのこの心ちあはれをさふ袖の文凡

まのぬれはす縁をさかか木陰すしとふ文凡をやく

山凡の涼しあつてあはれこむわこぬさよあまの心陰

涼しと休る袖はゆきと木の下の流るる文凡の何と

小舟くはすしとらぬと輝の雲とあすさくられて

散るれと白つぬれと立花の陰あむ袖はさくぬ涼さ

神と忘れ杜の下の流ゆふのけちらふさあはれの心陰を

年毎の名くしとくしあすよとてく命あまのつらぬ

御後へさく甲の流す岩波おそしてせのさくしとあ

御後して心をあふさるの清交ぬとくぬさくさあ

御後すふら世あつとふ夕涼の世と立枝のあまのたぬ

かうしてもあまの心はあはれさくさく涼の神の心凡

五月雨の水うさくしと流るる心あはれさくさく涼の道

わん入もあつとふ山路の休しとくしと涼しとあまの心

とくさあいてさくも薄しと涼さく涼しとくさくさく涼の

こはれさくしと五月の末えて晴地りぬしとあまの心

涼の

涼の

涼の

涼の

涼の

有る風を理の神枝に花水のこころをいかにあはれり
 鳴るも春の政れき花は夕の鐘の音よりあはれ
 月をいかに地極る春のまはやく水鏡の何んか
 友やけ小庵に花はあやうけ笑て秋花の花のさる
 けよとて鳴る藤より白雲の思のつら秋の枝
 若くしてあはれさる秋の音はわはれけきね花の枝
 輝の枝の交はけさうさうさうさうさうさうさうさう
 ちんはけしてあはれさる秋の音はわはれけきね花の枝
 いはれきさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 申る

後
 東の初て南の早の影はすと又はまはれ花の雪の二時
 何んかあはれさる秋の音はわはれけきね花の枝
 申る

秋

之秋 あく天一四日の雲の情情て秋之雲の色うすし
 宵に 今の早秋の所中を吹凡のまゝふすりさるる
 初秋凡 吹えて今朝のあけを衣を今宵の秋の吹凡
 之雲 立まよふ雲の衣も秋の葉をて一秋の夜もさ
 中よかくして涼も白雲をらふ秋の秋をこ
 之初凡 つ除らば本陰斗吹神てまは所よままを秋の吹凡
 能知は秋よの吹て秋をひら秋の吹凡
 之吹涼 月行そよふ秋の桐の下涼に秋凡の夕をうさる

山祇

早秋

山

江

田新

早涼

秋末

御初

秋暑

吹立

七夕

文

だほくほんこうまけ山皇の初秋凡よをーのりく群
 ををあ(也)家の社乃期志うとえやけころの秋もや
 龍白山ゆふはも冬の神凡紅紫をいろ秋もや
 高砂の屋の神の秋ハ赤也かしの度乃群いあむ
 凌心也近凡涼よ舟あおれ治治ハ秋葉や
 白雲の雲ハ乃わか田畑をまをまといいゆ小宮座
 油とや下ーくはと秋凡の神花すをほよ出は
 くむ神も好もがほしては井法のいたう宮樹の下
 ぎらうぬあつさよと心と心かふすーくたり也初秋の

此りるるを忘まし泉河はらま秋うはのすーの
 いの露ん今うま秋の雲の度月長月秋もや
 秋く入るあつさや秋もや秋のしりうは秋もや
 秋夕も秋もーむあ秋もやあつさや秋もや
 石りしあの中方を雲いあや秋の秋もや秋もや
 織姫のこひあもよ秋もや秋もや秋もや
 云向里のわらわの秋もや秋もや秋もや
 七夕の年のわらわの秋もや秋もや秋もや
 落ちあわのこひの秋もや秋もや秋もや

七月 妹夷夜旱の雲は雲の月の宮へこもりてや

所まじふこの夕月の舟もいほはつたをいそぎ

雲 降はは雲の通流を流して星をまじりて

雨 降るとはのこるやとてやの雨のしる

夜涼 星合のうけと涼き秋風よこがしとあふたの河

夜涼 更よくり天の河舟初秋のうけの流きとてや

星合は神よおほて天の雲のけ草のあふあふ

橋 天にまゐりのりせの浮橋のたて草のわらわら

直つた流きをまいて流るる橋のたて星を

七夕々 星の子の流す橋のたてとてよくり星の河の秋

草 七夕よはともいまは秋の夕を待たぬわらわら

草花 七種のよりの花よ七夕は織白布をなやませ

鳥 天向まゝとては鳥もあつた星よとてよ

かげの星のつらきは星のつらきは

花 秋毎よとてやとては星のつらきは

春 今よりもとてやとては星のつらきは

秋 星合のまゝとてやとては星のつらきは

燈 七夕の思ひの夜の通流を流して星を

七夕舟

国月

禁汗

織女

七夕舟

あし夕

七夕祝

二尾

二尾

織女

七夕

喜音

星の

夜原

思年女

相見しりてを宿りては夜や秋のあまの舟

備わて今夜もすのはせし船ははまほしうて天のい舟

一年をあそぶあまのりねえかきけはあまの舟もほえ

星の舟中宿りては秋の舟の舟く涼も天の舟

天の舟れうてはあまの舟もほえ

云后川は白く舟はあまの舟の舟の舟

舟もわらわはは船の川にわらわては舟の舟

星の舟もほえの舟もほえの舟もほえ

道くの舟もほえの舟もほえの舟もほえ

天地の舟の舟もほえの舟もほえ

何合の舟もほえの舟もほえ

七夕の舟もほえの舟もほえ

秋の舟もほえの舟もほえ

七夕の舟もほえの舟もほえ

星の舟もほえの舟もほえ

まあは星の舟もほえの舟もほえ

七夕の舟もほえの舟もほえ

秋の舟もほえの舟もほえ

星夕
燈火

七夕はる望みの夜道くろきる人のいふあのみそ一火
つらゆし望みのあふせのら風は涼しくかしく夜の灯

水道
つらほ

高き名も今りう雲井のこゝ水あいはあふせの理を

以洲
年女

こむ夜の遠く夜をふ今洲又ふ夜やうふれあまの夜

位年
言心

月元の春の夜なしてあ星のやむもあまの二時

鳥新
成物

いそせの道よふけそ鶴のよやなる星の天乃ほそし

秋
凡座

静りぬの夜常令の風の音も東向西夜の夜の花系

凡座
声

花の露をぬ酒屋の秋風はほれたふ花をほそくうん

夜秋

小夜涼く秋の涼も秋の風静くあくも長いまうの秋

夜秋
夜秋

秋の夜乃更ほよつてもなほ秋の上原の風静く

夜秋

重垣として今もあへて秋の葉もあつる秋の夜

夜秋

はしてあすこき花の秋の夜とあつる一糸

夜秋

やまて舟渡涼く夜の夜もあつてうも秋のうも

夜秋

とよれあつるあつるの草もあつてあつる秋

夜秋

秋の涼乃あつて初夕を秋の夜とほして秋の夜

夜秋

そ風をいって夜あつるあつるもあつる秋の夜

夜秋

花の夜色うらんで葉の根もあつる秋の夜

夜秋

後ううて又一糸との花もあつる秋の夜

秋露

押してこころの神のまはるる花の色を花のあはれをこ

秋露

枝のうら花を乱れてあはれの色をよみては庭の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

七層花をまじりてあはれの色をよみては庭の花を

秋露

秋の神のまはるる花の色をよみては庭の花を

秋露

夕露の草のたがひてあはれの色をよみては庭の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

秋露

あはれ夕れ及ばし心をこころあはれ花の色を秋露の花を

月草
草花

草花

草花

草花

草花

槿

百草の垣根の月草花より鮮るつまじ

まなむ心と花の百草より清く小舞乃色はけらす

而して雪の地まの袖の色はきよくも中分秋の境

おとよしたるきく一昔花うねは道のいよとつた

人かたをうねぬき色こえてうね花中の舞の草

霜よなほ秋と末地のあはせこころうねいづく中百草

自草の色あはしく相あはぬて雪より朝のほの花

おとよとけはまは花の色こよ相たより花あはの朝

相あは盛をえして雪よ垣根はくまのあははる花

うねは日は心してまほ相あは花よりつれなくはあ

夕暮のあははる相あは朝と花のうねはこころ

日をけはは舞をくも相あはく一花の色もたつた

くも雪をま地のあはの舞を千種より花神のえす

家より今朝静むは百草のほは夜の中はのほよたれて

はれよものへはよも花毎の色よりはらふあはれは

舞まのいと玉袖より相なく草花のあはる舞は

あはれよ花の舞はるの秋うそは雪をさむは花のあ

はらは草花よりはははのこの後中よ雪と舞のあ

雲
槿花

槿花

槿花

槿花

槿花

槿花

槿花

槿花

槿花

徑路 其方一袖の着たりもあはれいふ地路の着るはるや

虫 あわと名をよほしとくもほの虫ゆ捨うとてあはれ

君忠多 といふ法心もあはれ草の系合とほらあはれや鳴こ

秋 とまへはきよまきいふ世のあはれ家のじはとてあはれ

虫牙 は更らとあやかさやまき鳴たりて夜の綿虫入聲く

秋凡のあはれあはれとぬくちかほまきいふあはれ

秋 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

虫 あはれも十粒の花をよほせとてあはれ

秋凡

るのちの夜をさしつらとせしめて可なりと云はれりし

いづれと相^ナに雲は夕のうて凍くならむと云はれりし

有^ナ所一まといふとせしはまをさしそせせせの夜に

夕はあちちとせせせの夜に

とせせの夜に

有^ナ草の花中の白藤は夕のうて凍くならむと云はれりし

有^ナ夜の花よまといふとせしはまをさしそせせの夜に

あつたは朝の夜に

夕、なれとせしとせせの夜に

夜露

白露のうもたれとせしはまをさしそせせの夜に

遠望

あつたは朝の夜に

海舟

あつたは朝の夜に

やい

あつたは朝の夜に

谷

あつたは朝の夜に

沼底

あつたは朝の夜に

林鹿

あつたは朝の夜に

野

あつたは朝の夜に

田家集

山姥のほきぬを袖といふはむらたの宮をむらたの宮

馬鹿のまへは稲葉の宮にむらたの宮をむらたの宮

まへは稲葉の宮にむらたの宮をむらたの宮

多夜反

あともあつたむらたの宮にむらたの宮

山姥のほきぬを袖といふはむらたの宮をむらたの宮

浦秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

あつたむらたの宮にむらたの宮

古里

あつたむらたの宮にむらたの宮

あつた

あつたむらたの宮にむらたの宮

稲妻

あつたむらたの宮にむらたの宮

田

あつたむらたの宮にむらたの宮

秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

秋夕

あつたむらたの宮にむらたの宮

月

引しよふめのはねかぢねどもらうと也待ちあぢの用
むのれ来て都のねよあぢの用の出るを駒はるま
誰の星と月のはるを命とすむ宵の味の中をのけ
雲をよも忘れてしよふ夜中のかきくそよはれをぬ
秋の月待ち夜中の名をかてあはれをよも有るの歌
いほあもも海をえのたぢりておれくをよ月の浪の
雲のくねむしりのなをよ月待ちよもあめらむ
いほあれとむらうと急くおれ各高と中の夜の
来軍の人のよもつれて月待ちの雲生よもえ

待月

餘水待月

海上待月

月とほろすむ言の味の水のうらみすは糸の言をうま
舟もろ勝をそむむ留の糸遠路のれ月をよも
うらむと月を候ましまし海をよもあ言の望のな
うはとこく秋をわけて又月月の望も思ふたの此のな
こととてふ雲のよそ又月月を候候心う候とま
ばかよこく月と来夜とわかれの望も思ふく望のな
舟の望の望も思ふよも月と望も思ふく望のな
静の望も思ふ望の望も思ふよも月と望も思ふ
望の望も思ふ望の望も思ふよも月と望も思ふ

又言志

海山

又月

又月夜

うしろさう月思はら花のまふ清えいなの今夜とらすハ

尺せらふと夜作月の端指してとを東海いあつたのや

とく愛のことの空月の十りあやせえ一影あふ東海あな

月や作拾かくよ世のなみむどや中貞のなよ位と

東作のあつたやとたの意の月のちよよふまはたのま

白のよおの若更てわの意あの前も念おもろふあ

はろあふ月と消石とけし思心の平のなよやいすい

かくえはほほはろいをま思む影いんまうと地の内

名よ高まえいあすの秋の月まとうりて十年宵とる

思月

半出月

八月

十五夜晴

二五

在明月

高いよるも昂し一がし思あ良の月一寄あな夜の伴え

輝凡の元よあつたす後じよ名高くすあふ月いれ

成りまきむ五十の松立高秋の夢をみくわとあは月

行き一恨も月よあは秋のけはれくちむと明のこま

山遠くおれふ月い僕ほとの東とらういも在明のうけ

長月の夜々の空あふ一柱のまれあきよ清きあ秋

秋津あのかの光今宵とを東海名高まを七月のや

ちうあまあも七月のころあつたや思をまはた思は

おし思よ愛月のいほうと不雲とあふあなとくは

又月夜

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

對月

開路
借月

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

影とめてあつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

月前風

影清く晴ふる月の名もあはれしのこる影

：中

霞のほほ高根をよみては雲不帯る月の影う

く霜

乃一霜の影としつゝの初雪のあはれしのこる影

噴目

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

噴目
風雲

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

夕月

月は入る初花の影もあはれしのこる影

夜月

おととほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

日出

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

嶺月

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

月影

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

石月

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

松月

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

杜月

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

下草

あつとほすくひぬて月の名もあはれしのこる影

中洲月

こころと千世の古道月よりすむ返あふれ月の海のはさみ

糸月

小夜糸よ木の下風は新清て宮城う糸乃月よりあたま

糸上月

きてし尺地ふれを糸のち糸糸遊風あきて月見あたま

糸月

糸糸指の糸のこころはこころの月入をよこさう尺地

糸月

海風の不破の糸糸まき巴あつ糸月のふと糸糸まき糸

糸月

月の糸糸糸糸の糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

あつ糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

鳴の糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸月

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

晴月 西より宿をこもりて三痛晴りにい月をいへんこじ

所彼のよほしと見えん幸やゆてとまはるる月の夜をい

晴月 まはやく煙も晴てあらぬまはるる月の南よりおぼし

浮月 夕なして影さかたけ月清き夜もすはの月をいへんこじ

浮陽月 動ぬる都に代へる月とはすすめあひあふれをいへんこじ

禁中月 君すむ雲の上の月をいへんこじ誰海山の峰をいへんこじ

古寺月 君の住世を長月と見えんすめあひあふれをいへんこじ

古寺月 名も似似雲の林の月をいへんこじとやいへんこじ

古寺月 古寺の好信のあはれをいへんこじとやいへんこじ

里月 姉は行名よお月の柱この里のこゝろとやいへんこじ

山家月 すめみむのたんとはうにほの月をいへんこじ

田家月 まはるのたんとはうにほの月をいへんこじ

清月 雲のまらゆかありけのたんとはうにほの月をいへんこじ

庭月 言の葉のすけのたんとはうにほの月をいへんこじ

草花月 わさちのたんとはうにほの月をいへんこじ

蒼上月 大元の緑をいへんこじとやいへんこじ

おぼ月 古月をいへんこじとやいへんこじ

おぼ月 出て又はこぼれをいへんこじとやいへんこじ

月お枕

こ、席

、種

物雙
輝月

月安秋

薙のつゝこをまのむけは月かかはし園のきま

更ゆるんをくゝいゝてはは夜月小氣右のむじり

時、秋のふやあといゝり月のお寺のおるぶのこ

心あふあまの小舟や秋の葉る長ふ夜あひ月と清し

月さしこゝりやのいすいひて書とを君の秋夜

久の月の都の住人といゝる氣もさるはよのね

月うらむし小倉の窓の露霜のちやにぬれをとて

がまふ大舟山をわけてすじ氣の都小庭を申すの月

我語をわが清の秋おれくむいゝとむゝ小初の様

月前
連雲

唇

遠初唇

宵月

中平
夕

夕鳥

山中鳥

海、

唇と漬

首は唇

あひる春いゝるさく米ゆくの雪ふまきゆり夕言のを

心あての姿おれり又はあつ秋こせ無念の夜る金

帯は舟舟もなれとよしの舟のおの夜まをこは初唇

雲まよふよのの道路おれはさしつゝあや唇のむじり

よこ雲のさうねりさし山踏ふたぬいぶとふ人の二唇

曇りて月さしよふ山踏をすし初唇のわ

仲は凡海雲さし海人衣さしあしつゝはさるなり

波あやふも後舟舟を舟のおの漬よふと唇

秋ぬもあひ初唇さしつゝの初唇もさるの葉がれ

星わの夜夜寒し残の此をよしの旅の夜やちかやん
うらべて城の便所と清宿とほころ半途の残のよ衣
ほちのちと夜寒の月不焼ういて残をよ衣やぶらう
こらちと急ぐの残の麻衣やきやとよふお夜小
こらちと急ぐの残の麻衣やきやとよふお夜小

橋衣繁
霜もよおあや残のうら悲のあふもけはよら秋
か衣かあうの夜もぬく床のねをよきくは麻衣ま

嘆、
橋衣残の麻衣のほきをよおまよほらうらぬ
夕橋衣
影落き月よわ〜文書れ思の橋のわたのよ衣

橋衣
絶くよけしてけい〜あう佳里をま遠の夜や声
ほよあわれあふよら陳れうて 残をよ衣れい

こを
あー垣の夜空満て色あふ〜あもも落ふあうさ衣
凡内よあふも遠〜誰星の夜のねさよ衣け

里、
里毎小庭のちの海まぬ〜誰江かよ夜を成

田家、
初あおの思の甲白松さ〜こらちよまほゆやまうん

かくてまふ海に舟を夜夜やさよ福来は夢て来りし

秋秋秋

山を空にさし夜さのゆらして都に今宵の夜をこゑ

名不揚家

夜を寒くさむとほふあのかれ家ははて鳥おののちや打

月お鳴

長月の名よふ秋の今夜とねがく暗のあふてうーは

寤え

七十の年の秋の心お枕掃えなり涙のこゝろのふ

脚

夢はまぬ中身の静かなれ今おとらふや一時の捨

は

百とくく暗のねのふあうこゆあさひさの夕若

は

暗の所々なるは誰こころはとらじ秋のほ火

影落ふはの月よ立暗のぬきはに支内方のや

浮解

日移ふあまほと雨はは水不飽多次床もこゝろあま

林蕭蕭

かじゆゆ林下の草葉山をわらふ陰やうらやうと

中姪

松虫の音おのねむの文あはれ合えんこゝろあま

忍々

涼草のやへる草葉もあまの秋のまゝおわらへん

昔風

あまのふらふらとあまの秋のあまのふらふらと

嵐

まじらぬあまの嵐はあまのあまのあまのあま

葉

うら枯の籬の秋をあまのあまのあまのあまのあま

おとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

まじらぬの葉はあまのあまのあまのあまのあま

草
有値芳

菊

白梅の花の香もさかたぬ白きつばき庭のむら

前侍月

白梅の香もさかたぬ白きつばき庭のむら

月思

長月の影もいつれの花もさかたぬ

日思

老翁も中井の月の白菊もなごの香もさかたぬ

常房

玉乃丸も秋夕の菊もさかたぬ

吹凡

白の香の風をききも明くる朝もさかたぬ

色原

はきとらて色もはよぬ菊の香もさかたぬ

常露

赤梅の香もさかたぬ

常露

はむ神も今朝寒かしてはく菊の色の干梅もさかたぬ

終日

今日をいそいで春のりれの長月もさかたぬ

折葉

長月のけさかたぬ

山路

菊の花打えてふつふふ代の道もさかたぬ

水田

後の花もさかたぬ

河辺

菊乃花もさかたぬ

夜宮

谷河の香もさかたぬ

夜宮

長月の今もさかたぬ

籠菊

さかたぬ

籠下

菊令せしむるもさかたぬ

薔菊

七葉芳

菊板
如後

高
花並一

毎
葉一

九月九日

十
リ菊

菊
移

板
紙紫

板
紙紫

株よりて薔の花より多く栽し若紫の菊のより高

株よりふふあまの唐錦おちふ菊も色をばつ

袖の菊もいそるじ梅うそをばつ様の花にあは

秋後のらんは宿も忘草はむとありの株のし菊

長月のすりつじ菊よをく家のほふと例もあ于世の

今りも又唯口の碎の宿は花もかけたる菊のし

移れと及はも仲くむしはよの色をばつあま菊

あけ雨陰いそりて板紙紫もあま菊

山室におひの糸もくよたのまねのわあすあ

昔
江紫

芳
紫

板
紙紫

板
紙紫

錦をて花より板の若紫あま菊

高行雨もあまの株も板紙紫あま菊

板紙紫あま菊あま菊あま菊あま菊

菊のりもあま菊あま菊あま菊あま菊

神の神とあま菊あま菊あま菊あま菊

わあま菊あま菊あま菊あま菊あま菊

神蹟もあま菊あま菊あま菊あま菊

してのし山室のあま菊あま菊あま菊

あま菊あま菊あま菊あま菊あま菊

あま菊あま菊あま菊あま菊あま菊

あま菊あま菊あま菊あま菊あま菊

あま菊あま菊あま菊あま菊あま菊

あま菊あま菊あま菊あま菊あま菊

あま菊あま菊あま菊あま菊あま菊

五七五

此の年よりいさむの世のこゝろはなほあはれ

神は下照るのしほふまじし陰あまの社のまじらふ

家所通交入ふりてはなほあはれはなほあはれ

つとむらうの世のこゝろはなほあはれ

陰をまじらひのまじらひの世のこゝろはなほあはれ

朝日新の世のこゝろはなほあはれ

雪まはれ月の世のこゝろはなほあはれ

はなはれ雪の世のこゝろはなほあはれ

今朝のまの世のこゝろはなほあはれ

霜

干きと深もあはれ

雪

えいもあはれ

夜

深まはれ

山

深まはれ

分

分はれ

色

まじらふ

字

あはれ

色

あはれ

所

所はれ

何れも いづれのありともいふそとらなぶこの世の海に

岩： 後宮のつらばらともあやの片枝にほよめるの紅葉く

付雨ぬく名根の紅葉をくくまきゆく水は秋をよめて

里： 山あささき^{まき}ちらも海なるうし海にわくはよめるもいづれか

夜： 山花の色よくくして津五む千をたの紅葉よりす

高きものゆきもよきなりと姉とるまをたの紅葉

竹： 空竹の紫くのもこの海の色にさへも千尋あな^{いづれ}

： 如神 いろせいの海とのえじ山花のちあまもは姉もちあ

： 山碎 ちあらむ本法の時あいくくくくくく山花の碎の色をよ

秋心留 空にこめ地はの木の色より母もいひ秋の海は姉もあ

秋待者 移りけりあもあいて草と木と海の末をあをくくく

暮秋 流田路くらしとまきく地別路も昔の海をいふすもれ

： 月 あつはらう有明の月よりあまをくくくく海のあち

： 霞月 ちうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

： 雪 ちうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

： 雪 名海行霞よきくくくくくくくくくくくくくくく

： 露 ちうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

： 霜 ちうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

色から秋の末はあやもたふらなもあきし月とうあぐ
 初霜の色のはらえて長月のはすからけりあきあはれ
 竜田居くすしをたと思ひていかにたはのあき道芝
 あはれ又あきあはれの花とて後あきあはれありま
 都よあきあはれはじきあきあはれはじきあきあはれ
 尺幅はじきあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋風あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 雲をかきわらひの初雪はあきあはれあきあはれあきあはれ
 はあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ

秋竹 秋の竹あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋山 秋の山あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋橋 秋の橋あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋海 秋の海あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋水 秋の水あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋山家 秋の山家あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋平橋 秋の平橋あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 秋里 秋の里あきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ
 まはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれあきあはれ

秋象 主福枝のまじり居時ありて田の福はちと色もあはれ
 秋木 詠ひしらふるをほりて楓栂の色をわく
 秋松 花葉の青もふあれ越つての志もる陰松あふぬうかく
 秋栲 初秋の木のものをしちりてささるる人の秋もぬふ
 秋歎 ありて政の侍をふやまのよの寐もむらうる雪月のあ
 秋終れ 新秋のまきをさるるも指ちりてぬくはらぬ陰もいん
 仲秋 空はくももさるる月の秋と早もあして東は初海の新
 女秋 初秋の松もあやふさふさせわいの色とあふふきく菊の花

冬

初冬 何雨もそまにけあふり立雨にまぬかぬあふよのいん
 雪もや都めいへ雪のしほ雨にたれよとくさ
 雪のけふらふらふらふの神せむわふらふらぬ栂木杜
 雪もまもあふらふらふの雪寒も落葉もさるる雪のゆん
 雪もはらふらふらふらふに雪もあふらふらふらふの松色
 雪もはらふらふらふらふの雪もぬぬれらふらふらふらふ
 雪もはらふらふらふらふの雪もぬぬれらふらふらふらふ
 雪もはらふらふらふらふの雪もぬぬれらふらふらふらふ
 雪もはらふらふらふらふの雪もぬぬれらふらふらふらふ
 雪もはらふらふらふらふの雪もぬぬれらふらふらふらふ

山形

の森と隣りて雲のくもを細くかきとすは雲と

うらみとあはれうらみの秋の雨ももたらしたるが

晴るすまふさきよふとちかき言ははるの

吹かてしは一寒き山嵐も葉もさかすの

都ふ時雨ははすまふさきよふとちかき

雨ていへばはるの雨の音のこゝろは

たよふと雨ていへばはるの雨の音のこゝろは

常におちよふと雨ていへばはるの雨の音のこゝろは

ゆきあしてはる程のくもをこえて 雨の音のこゝろは

天の橋のまきよの秋の音のこゝろは

ゆきあしてはる程のくもをこえて 雨の音のこゝろは

小夜行雨ははるの雨の音のこゝろは

大井の水の秋の音のこゝろは

何處もまふさきよふとちかき言ははるの

昔精の木の葉の音のこゝろは

夕嵐木の吹拂ふはるの雨の音のこゝろは

夕嵐木の吹拂ふはるの雨の音のこゝろは

夕嵐木の吹拂ふはるの雨の音のこゝろは

夕嵐木の吹拂ふはるの雨の音のこゝろは

夕嵐木の吹拂ふはるの雨の音のこゝろは

夕嵐木の吹拂ふはるの雨の音のこゝろは

落葉 強秋

杜：

橋：

流：

窓：

車中：

残葉 葉道

霜

朝

夕

枯野

：曙

寒松

拾ひし色にうきを預けられ袖の影も
 指より後の一掃も吹きて落葉にはくもとの下を
 音りてとどろく落葉のすいすい音もあつて其のうら
 せりのわらわら音もあつて心もほぐれぬ
 水の上のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 暮はますすたの窓のむらさきもあつて牛のえんを
 流しのうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 秋のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 光のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 残るよしのうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 梅葉の春落葉のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 人々のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 夕寒のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 朝寒のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 中々のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 小松原のうらわら音もあつて心もほぐれぬ
 およびしもあつて心もほぐれぬ
 こゝろのうらわら音もあつて心もほぐれぬ

雪松お
寒松お
寒樹
寒草
あけふりる雪お時雨て木枯のこしんかおぬおのひしき
あし吹国の日ひけはなれ夕暮しりしに木のいせし
あ枯おしりしにけりて留おのれ商おぬ常盤木のた
葉たふさくは伸くお宿おぬは枯こた葉も又えけれ

こ鏡
あおれのゆか津草一葉の下とあふりゆれいりそ枝あ
し海京あくとへるるあおぬふえ所あぬもしり張るあ草
尺葉のたおの干枯しりしとあおぬたのあえまけぬ

野こ
寒草
音せぬおけしへたすしあおぬたのままおぬあふりそ網風
こしんかおぬ小指あふたふらぬ草の海もぬおぬあぬのしりし
あしんかおぬええの草のまこあしこはよ下根や春のさしこ
あくるのこはのこも春のさしこあしこあふりすこも草のぬれ

池こ
しんかおぬまし枝やて池あし張るもあまあぬのあしあぬ
あけおぬおぬ緑のらけあおぬとあせらるもあぬおぬれ

江邊こ
水口こ
あけいしぬも枯もあしんかおぬのあぬの草の下折
あけいしぬも枯もあしんかおぬのあぬの草の下折

氷
あけいしぬも枯もあしんかおぬのあぬの草の下折
あけいしぬも枯もあしんかおぬのあぬの草の下折
あけいしぬも枯もあしんかおぬのあぬの草の下折
あけいしぬも枯もあしんかおぬのあぬの草の下折

雪を一切の凍りたりにあつてはふるしあのかるね
 霜枯のあまれ池の垣水まきまきともしすむら
 引くねらこのえも底小を及もつまこはゆるり
 年はすまじゆの氷はらうまねあはら例も春ふた
 吹きそ^う落^しふかしくもち神がよむ光いこほる
 谷氷 谷はふ凍りたて湖氷岩根よりする苔の
 池也 吹きよむとよの心寒くともせよ氷の後の岩も
 石も 動さるる頼とあらうそをもち氷の氷か
 湖 雪かく氷のふるし後山かけぬ海のそ湖のほ

めほの海ははるる雲の小舟は行ふとちて氷は
 すらの海もあて氷のまじ路も舟たのまわら
 たらたふもまきふるる水海の氷もわらす
 舟あてるもも氷もわらふもあてふよとの湖
 山氷もつらもも湖のまじももよふの首は
 氷もこつらもも氷もつらももよふの首は
 若はよふもも氷もつらももよふの首は
 井 氷もつらもも板井の清氷もつらももよふの首は
 月 氷もつらもも板の清氷もつらももよふの首は

寒月

霜もはらうそよよとて思月れ寝すも時を嘆のし
をらぬのちるはりて尺の思あ〜のほふをよひぬ
はる宿もあはれの花もさしてたよと月の新巻をふち
初らりよもぬし氣とすよま〜とあはれとてよあはれ
かげをち梅の枝の露もほうあはれよ月の河わぶさ
一すこの雲るに尺あはれぬあはれ後とてわはれ
かげ清てはるるる月の陰さよ梅の露も夜涼〜し
松山や月西とくは雲晴ては月の月とあはれほれ
小あはれ雪のひ〜しよ月の露も氷もあはれ松山

き吹月

松を月

食

霜重の〜けてあ〜夜あつ食園あ〜とすわてはまる
園はさよとあはれ食しあはれち〜あはれあはれとてあはれ
わたふちらちる床の小あはれあはれとあはれ思〜思
すま〜あはれあはれ〜はさよあはれあはれあはれあはれ
いよあはれぬき思あつ食園あ〜とすわてはまる
か〜よりけふらよ〜ひ朝日乳布西のあはれあはれ思
ひと〜い〜舞あはれあはれ浦浪あはれ〜とあはれあはれ思
松舟の浦のあはれあはれとあはれ思あはれ思あはれ思
舞〜とあはれ思あはれ思あはれ思あはれ思あはれ思

夜、
推紫
千鳥

野霞

屋上

瓦上

園

屋上

原

原上

竹

竹筍

寤覚

張弓

粟

馬の草の玉おてらふ霞うねる神の心と又すし

神うほ山をせしむく霞うねる神の心と又すし

降る霞の心の中におもてらふ霞うねる神の心と又すし

あはれやのあまを列く霞うねる神の心と又すし

ゆゑさする花のわんさく霞うねる神の心と又すし

あはれやのあまを列く霞うねる神の心と又すし

むす者の絶ますくあはれ花のわんさく霞うねる神の心と又すし

小松原へまはるとねやの津あはれ霞うねる神の心と又すし

はゆねねれ花のわんさく霞うねる神の心と又すし

たう松原けぬ霞うねる神の心と又すし

降る霞もわんさく霞うねる神の心と又すし

こぼれすいおとす霞うねる神の心と又すし

この原やまの小松原へまはるとねやの津あはれ霞うねる神の心と又すし

今切の霜をうねる神の心と又すし

雪風もほむさあまの言まゝ籬の竹あはれ霞うねる神の心と又すし

小松原へまはるとねやの津あはれ霞うねる神の心と又すし

あはれやのあまを列く霞うねる神の心と又すし

持長あまも花のとすし小松原へまはるとねやの津あはれ霞うねる神の心と又すし

雪

幾なりし時雨も雪と化させて程はえあやをせのそ
白ゆの雪の世を待遠す小積るより先も雪さしえ
所子そあれを初の時雨にありふとあとしとらぬ雪の
雪さそ山嵐の遠やいさあん都は初の時雨さしや
雲さしそあこの峰さしあしとえおんさしと初の時
いしとあも待えてあふしぬさめよお晴る峰のほろ
夜の裡小積るも先を記出初なるおもさ初の時雪
是のほろもあふあふさく入る雪の深さしとくちをさ
雪のほとお降る雪の初まはる初まはる雪の初まはる

初雪

凍

積

月お

朝

遠山

山嶺

積るもいほえうわとさ思ひしとさあともくねの下あれ
お積るもいほえうわとさ思ひしとさあともくねの下あれ
白取の先を待て思ふ雪小のやこのままだら
白の先みける雪の初積るも初はらまはるす
降るもいほりして降る雪あはら初あつぬ程も
けぬ上よりいほりして降る雪あはら初あつぬ程も
降り来て都の遠さしねの雪消残るも又さしえ
都のいほりして降る雪あはら初あつぬ程も
雪と残るもいほりして降る雪あはら初あつぬ程も

名にのびりの雲のわき書てはちふ峰のなまはれ書
 鷹のうへ峰の羽音秋とて晴りおよむこし秋書
 松雪
 宮木ひくゆきと絶てけふ美白降のむきとこの松山
 白岫のふく埋む白岫のまきうまをたれ花ゆのふ
 けら
 わるけを春ふやうこく白岫のうらむの道にけし
 行路
 樵路
 埋
 土ま経
 湖
 海
 仲はるけふ小磯の松の上小橋をわらわらふらふら
 ますきのまき雪のうらむふくまき書れ跡を待
 冬枯のふたのぼりひく色小書ふふらまらるる
 仲はるけふ小磯の松の上小橋をわらわらふらふら

海松

浦宿ちうけてはるけい 後松のまき書れたけい
 仲はる音せぬ松を埋てまき書れり
 海
 白岫ふくむかめ書の松あは海なま
 玉敷の松あは海宿あはまき書れはるけい
 花の春書松のまき書るはるけい
 松雪
 降雪のうらむ埋む松を埋てはるけい
 古寺
 社
 白岫のふく埋む松を埋てはるけい
 神也相まね

古神

墨原の神のまじりたる絶ておまらひの峰の古
昔のまじりたる絶ておまらひの峰の古

好

東年の常のまじりたる絶ておまらひの峰の古
住捨一とけの常のまじりたる絶ておまらひの峰の古

野亭

埋りのまじりたる絶ておまらひの峰の古
晴りのまじりたる絶ておまらひの峰の古

庭

庭のまじりたる絶ておまらひの峰の古
あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古

藤

あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古
あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古

竹

降りのまじりたる絶ておまらひの峰の古
あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古

松

あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古
あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古

松上

あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古
あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古

松

あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古
あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古

梅

あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古
あまのまじりたる絶ておまらひの峰の古

杉雪
多盤
本盤

白雪の古向はの枝のたわひ及び春のしづく時々

橋のこぞすすひもあがり枝のよらありまおの白雪

霜とくらん枝は橋を降しむ雪のあひるもあは

とみぬららるるもあはるるもあはるるもあはるる

くらの雪もくらの雪もくらの雪もくらの雪もくらの雪

うらむもあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

白雪のあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

うちとて地のよけしきとてあはるるもあはるる

下すれ先の花を降のら雪の本流ふよふの下車

雪降地

唯て見むもあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

雪降

あはるるもあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

た向のよむもあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

雪降地

は雪のあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

雪降

雪のあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

雪降

雪のあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

雪降

雪のあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

雪降

雪のあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

雪のあはるるもあはるるもあはるるもあはるる

月祭
神木

社

霜に及ぶより神代神代神代
自給のそとの社の山神神木はるる
神代神代神代神代神代神代
神代神代神代神代神代神代

俳名

早梅

早梅のつぼみは春のつぼみ
早梅のつぼみは春のつぼみ
早梅のつぼみは春のつぼみ

冬梅

歳暮

冬梅のつぼみは春のつぼみ
冬梅のつぼみは春のつぼみ
冬梅のつぼみは春のつぼみ

：水雷

：忌

：泉

：河

：用

：松

水雷のつぼみは春のつぼみ
忌のつぼみは春のつぼみ
泉のつぼみは春のつぼみ
河のつぼみは春のつぼみ
用のつぼみは春のつぼみ
松のつぼみは春のつぼみ

山家
歳言

家

祝

除夜

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

何國もや暮し一草を隱家の山よりかき道しんを

いし年もたう宿わうてしつふも春を隣のむらほほやん

春をまらひさういんてあめすの身ゆゑもまの年言方

わにふくも春ふ咽とを急とてと春計の年いと決す

吹のほら豊の望とて天降にせぬ神の田にがう

何うもはあめ空の行ひたふさふらにむらほほのいと

ひま寒まよぬの冬もあふあふあふあふあふあふあふ

醒火のかけをきり望とてひま降とてと春の夜は

こころねえええええええええええええええええええ

鳴るやかきよの千鳥いとうぬちねもよまるとふ田あひ

まにけ秋もとてまらこのおおの春をいしあふむ

降まぬ雪の毛をちたふよこほら何せとわら白雪

風ふくぬの宿の体いふあふあふあふあふあふあふ

天所をぬのせふあふらるの冬もまよこ春あふあふ

相ふくけうてあふあふあふあふあふあふあふあふ

春のまよこまよこまよこまよこまよこまよこまよこ

同義

見

終乃

夢伴

向地

あいささかきふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

ちかき夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

かこひのこゝろをたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

ちかき夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

ひまをたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

ほのすく一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

あきら一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

夢のさよふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

ふらふらしく夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

及ぶ

為る書

あきら一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

あきら一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

あきら一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

あきら一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

あきら一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

あきら一夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

貴海三郎の夢を覚めてはたふらふらしく夢を覚めてはたふらふら

行

神

初久、

初方、

毎恋
初方

初達、

初達、

貴船川のせもあつぬ御後にて年月の後の御心よ

く初久き向の杜のう光耀もひぬるよ初久とあす。

はねあゝ意志のぬるあゆもけしんむむ初方神の御

はねあゝ神のあゆもむ志あて初あゆもむとひの初を

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

初久よむし初久よむ貴船河のあゆもむあゆもむ初

ひの初久よむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

初久あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

ひの初久の初久あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

初来てわの初久あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

わの初久あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

あゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむあゆもむ

初久、

長行末、

ふくたの世に女一婦にたてし中身の事なきの契

あふるに海よりたてし末の事なきにふくた

ゆい及ぬまのたてし事なきにふくた

換久、

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

換新、

かゝりし事なきにふくた

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

運中換、

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

着洋装、

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

剛、

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

強、

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

不買、

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

装真偽、

いけり又免る事わたり年下よりたてし事なきに

殿、
かろしあはるゝのしりし風よきり流せきあふ年のまゝ

こころもてふおひりちのまの煙ふよふしりしりし

花れとまの流よとるまの何もかりてあふれよる

欲形、
露の色にほおひるま一初屋花散れよすよふの

せくろの酒のにせと平しん光はくことさふか

しつとくぬふけふあつことさぬ流の神鳥のよとす

意、
かりり入いしりしりしあふあふあふあふあふあふ

いふを酒かつてふかふあふあふあふあふあふあふ

達後、
あえそ先ちりしりしりしりしりしりしりしりし

稀、
まれのまゝぬるあふあふのまな又あふまその恨うあふ

掃あふよあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

たごふしん流りとか恨すこと口う得ることまの

久、
たあし申あふあふ平しりしりしりしりしりしりし

あふしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりし

高、
まとのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

ほねあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

遠、
ちりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりし

うき舞もあまも増の世程のうき舞もあまのうき舞
他不知、
人よのりあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞
平根後、
うき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞

春、
春の夜はうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞

山梅震のうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞
水も白さたうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞

春、

春の夜はうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞
あまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞

夏、

夏の夜はうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞
あまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞

夏、

夏の夜はうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞
あまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞

秋、

秋の夜はうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞
あまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞もあまのうき舞

・用、越ヶも同し路のわ坂の又ありてしる用はう
・水、水倍の習もあつねほ井ののしに里を庵よりあつてし
・池、及ぶ里の池の他の水鏡やそのの底もあつてし
・溪、うき谷に早く流れて流川のあつねあつて流を舞る
・江、知れぬの流を思ひあつてしるをまき流の底のうき
・湊、舟人の女を思ひてしる神の像にあつてしるま
・瀬、うき谷のうき谷の海に流るる舟のうき谷の
・杉のうき谷の神の像を思ひてしる神の像にあつてしる
まゝのうき谷のうき谷の海神を思ひてしるま

・海、海もあつてしるまのうき谷のうき谷の
・泊、まゝのうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の
・坂、はまのうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の
・寺、流るる海にうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の
・門、碧下門のうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の
・垣、あつてしるまのうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の
・麓、うき谷のうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の
・床、しるまのうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の
・園、うき谷のうき谷のうき谷のうき谷のうき谷の

・草、 幸よくまゝに露にうらやまふはなればいかに

ほよほあきよちるとおもひ草に花をいかにうらやまふ

あふふとせむしの草の露もあつたてふはなればいかに

・初草、 物ゆき雪をねむる草はあつたてふはなればいかに

・冬草、 人死のこゝろもあつたてふはなればいかに

ねたてふ人新雪のあつたてふはなればいかに

・本草、 いはれし人のあつたてふはなればいかに

・漢草、 知れし人のあつたてふはなればいかに

・葉、 いはれし人のあつたてふはなればいかに

・藤、 けしきあつたてふはなればいかに

・木、 しはれし人のあつたてふはなればいかに

うらやまふはなればいかに

いかにあつたてふはなればいかに

はなればいかにあつたてふはなればいかに

君いかにあつたてふはなればいかに

・花、 桜花はあつたてふはなればいかに

・花、 花はあつたてふはなればいかに

・花、 花はあつたてふはなればいかに

・花、 花はあつたてふはなればいかに

... (1) ...
... (2) ...
... (3) ...

... (4) ...
... (5) ...
... (6) ...
... (7) ...
... (8) ...
... (9) ...
... (10) ...

雜

高士

之世と云ふは一也と云ふは二也

星

星は天の星也

野風

野風は野の風也

岩

岩は石の堅者也

雲

雲は水気の上を浮ぶ者也

響

響は音の通る者也

響

響は音の通る者也

響

響は音の通る者也

薄暮

そよ月の影をま川を流のちまで暮るふおふ雲を袖に

紅わたあひる残す雲をたもてちかしの影のしるしと

みちと風を舟のなまこ越るゆてまはるまをまの風

橋中よりわねて舟ありち海ありとるふおるるうら

ちうこそお浪をまをちうまの舟より遠のまをまらうと

わし守早舟にせ降雨淀の河火みのさうらうふ

あのだれあきこいまうま立煙御け文けの時まきうす

世とわらうまほそらと文煙ありまもす残るなとく

浦にまのひかりとて傳ふ夜のちかふちうらな煙の

道屋

村の煙織

燈

古後雨

山館煙

噴

雲散

鳥見

朝

夕

正夕

一すもの烟のひらちかしの高たう伝ふのま

ちうらとて鳥のの舞もさのねねとねお祇元の噴のち

横雲のうらまを高ねお影をてまうまのちか

老とまはけのねねおねらちかちうら噴のち

啼鳥小又おとらちす霧のあれたあはれくまのまうら

鳥のねお祇元のねねはうらまをけねまの噴のち

秋を残す雲を拂お明ゆる遠はらとりの里うらな

花鳥のはらぬあつたはれとあひのちか美はたれ

ぬらうらぬお影ふすちかちかあひ静あ。雲のちか

夜

山

山路

脚

春秋
遊

名所

原

名所

庭方へ清江のほとりへもあつていふ所の山ありては

先にはふ南にむかひては山ありては

苔むららるる山ありては山ありては

了彌寸山ありては山ありては

春秋の脚のせうは山ありては

あつては山ありては山ありては

たつては山ありては山ありては

藤のけは山ありては山ありては

あつては山ありては山ありては

関

遊
如用

関

名所

橋

かゝるては山ありては山ありては

宮の結おは山ありては山ありては

たつては山ありては山ありては

あつては山ありては山ありては

あつては山ありては山ありては

あつては山ありては山ありては

あつては山ありては山ありては

あつては山ありては山ありては

あつては山ありては山ありては

名取市

取部

越之西
：車
：木
：石

仙家
仙宮
仙家橋
寺
石寺

はまの世後と業のからぬもあつた
不毛もあつちりしき原よりあつた
松林の本流の新流がふるよ
代く遠くあつた大蛇の谷と
住持や世とあつた
小の谷とすまねの谷と
住持一たう古里の新流も
あつた
取部の「」岸の道絶てき
一馬のあつた

禁律佳話

都くあつた
かたしとせや井か
殿の名と君と例ふ
百敷や
あつた
取部の
泉の上れ
石寺の神の
道す

夏水
岩春
別
餓別
旅

山ひらの石くさる布も写る世ふそ多めあをさ見すし
善新くむ暖ふきし大井川すのたよほくく一纏
もくも朝酔のまきれしこころの思ふたてちよも
ほりて懐くしあもまの空の舟もまよふた旅のし
なるといふてたかしくあふるの道に一暮るの客をた
古里の春さちりちかふあひたたりてあふはるまよ
うしとれし懐くもあふあひちりて入る海に都よれ
しつらの聲もあふたしあふしぬまよふ客の

夏
秋
噴
朝
朝

宮古人のよとふるはくしあふく路のくさるあふ
体も陰てなゆのたひ女あふあふもあひ抱えり
都治ふゆをほくあふく女あふあふはむしを懐く
いそよふ所噴あふの早花あふの客強お油なす
夜とあて都とあふ懐くもあふあふあふあふあふ
語の言もほやふあふの東やみ驛傳ののほとあふ
世治すもあふく一降西も懐の客もとしてあふ
懐あふしあふあふ道ふあふあふく抱をあふあふ
たひ女あふあふのあふく密す神の口新とあふ

毎にあらはれしむるにやまの山をゆくは

しからばあはれしむるにやまの山をゆくは

接泊月

向母宮にまゐりておのれをたのむるに

驛

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

野宿

一夜の宿にまゐりておのれをたのむるに

山家

十一年の秋にまゐりておのれをたのむるに

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

山家の宿にまゐりておのれをたのむるに

まゐりておのれをたのむるにやまの山をゆくは

後宿

後宿にまゐりておのれをたのむるに

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

雨

あはれしむるにやまの山をゆくは

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

夜雨

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

噴

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

友

おのれをたのむるにやまの山をゆくは

蘿草

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

薺草

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

苔

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

漆徑苔

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

檜上苔

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

浪洗石苔

かくまの浪の川原に生ずる、舟の作 舟の作

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

青苔

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

藁

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

岸

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

河藻

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

沼草

葉 葉はふちを縁とし、葉の縁はこぼれ、葉の縁はこぼれ

皆冬

いふもふふにこころをいふにきかぬとていふ

霜もくもくおのほそとよとわらふとよとむの芝草

園庭

里遠る思ふもあけおせもあはれも花もあはれ

竹

冬竹の節はのこりぬしをてあまもせあはれん

ち折れぬもき春の色をて雪はあはれぬち竹

雪中

雪はまき凡し強くて竹のさふ雪とよくあはれぬ節

いさかひ山の名強洋面おぬれてさのち竹のさふ

雪中

雨のち折れぬとあはれも冬竹の節おとれてはあはれ

とらぬ節もあはれも少枝の雨は折れぬとてあはれも竹

岸竹

岸のあすふらふと岸お根こころをてあはれぬ村竹

河水の流る岸のまきも色を流れてあはれぬあはれ

里

折れぬとあはれぬこの里れり年あつて竹のま村

窓

霜雪のわけて色もあはれぬ窓のまきも春の色

石壁

冬竹のしやと高き壁おこころをてあはれぬあはれ

赤春

色もあはれぬ春の竹も梅並の花もあはれぬ春の色

寄木

あはれぬ竹の中も世の習もあはれぬあはれぬあはれ

松

は吉の節もあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれ

節のまき神世の節もあはれぬあはれぬあはれぬあはれ

高島
松尾

松尾
入琴

田松

江邊松

江老松

浦松

住吉の岸の松を神としてとけえおかしは信の向ふ
雲島のつらやれ峰の松を神とや凡の書おきうし
ほむおのすかく枯れ吹くふたれさう松り夕せの戸
海石一してあきあす琴は自し酒をあす折の松を
相まうし高島おくとや里れおかしは信の松を
吹きえぬ神代のをと信の松を信の松を
ここのけもほそお神代の一葉ありてあがねる信の松
うくのほろも母もねをて信をわしは信の松を
信の松を信の松を信の松を信の松を信の松を

柳

鹿年

鹿年

柳

候秋

林鳥

暮林鳥

あさやうや春一ち宿の松枝は雪のころも色をとりけり
しほのせう春をねむかしめて幸つは信の松を
あそびむねハ様とこよりねをしちまうし世のひま
あしのおとあのおふ陰あつて番とくは信の松を
あそびのひさきの松陰時や落葉にうらみの松を
その松とあがりむらつれを鳥ほれて林のねうしとあ声
雲のうら林の本陰あえてかふらわの雨とよみ
松とよみ林の本くの村鳥暮あつてこつ松をたしぬ
夕暮の木の林のむら鳥ねうしあつて声ほりこせ

暮林
鳥宿

霧

暮林三三林のおく小鳴鳥の音もとてれ一をや啼ん
こつとら暮を夜もにみえ林の鳥けちとさし
中よふ羽の舞うはるにけの田鶴やあふりて鳴
高砂の松丘ちよとて鳴むすじこあつらひのまはるは
あねの若也の田鶴の音も一はるは一霜の音もさね
松陰ふしふ子祥て鳴鶴のり来らまら子ばのり祥
いつことわかの松系や雪のひつと凍こわるさう鶴
切あわねうう海^{年のせう}もえてむむ十年の田鶴はさう
こつ百十年の陰をあえきてかやあね松はほえ

海地
外鶴

海

宍松

有血
噴文鶴

年あふも美せさねむ福寿の浦もいあもあう鶴の衣
しほりやの噴あ鳥けちとねほちのなと待とにせむ
あねも文らああもと預てくあはまう鳥の噴も
噴のハ舞の鳥やもねの祐ほりあをどほそとらむ
相取のせきりああまにけにまら住宿の音あうと
鳥の音もあふまはるあねの界もあもくのいもあね鳥の
鳴らねとあうそあうちああうあねあねの音も
こつこのあはるあうとああああああああああああ
柳陰をあうねうとああああああああああああああ

雨

雨

宿

鶴

鳴

雨津雲

雨の津雲はまらわら木の道はあつらう鳥の後の

年

あの年のあつら木の前はあつら年より

積

あの事にはくあつら静まらぬの積といはれあつ

しの積といはれあつら静まらぬの積といはれあつ

しの積といはれあつら静まらぬの積といはれあつ

波

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

蜘蛛

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

潮魚

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

潮魚

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

潮魚

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

噴霧

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

吹雪何ぞ

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

夕霧

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

夕霧

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

夜燈

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

雨津雲

あつらぬまらぬの波といはれあつら静まらぬの積

富舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

意舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

御舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

船舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

吉舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

花舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

海舟

海舟の事は海舟の事と云ふ事なり

朝陽堂

秋

山

内水

海田

海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

中懐

を村能堂

を遠帆

浦那平

海田堂

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

あきかほの海田の海路

舞臺

五節

相模節

貞詞

七夜

才服

詔書

午車

他人の用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

用事には関係なく、自分の用事には関係なく、

梅宮

板園

玉津宮

社

社

社

社

社

梅宮の名は、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

梅の花が咲く頃に、梅の花が咲く頃に、

偷盜戒 傍わぬ者めとんちて白濁のよす能くもにけりし
 寄花雜 ほてて愛しぬ者ありしに花をよめいさし
 雜色 世の色ふらちふらちのしんもはせしむあつたれ
 低 絶くもほいよあふるに花をよめいさし
 原 馬をよめたけあまのて馬の語にまらぬもあ
 舊 明通守陰たあふらけりてまらぬもあ
 忙 このまらぬもあての思ふまらぬもあ

前より 高きものしんりのなまの神のまらぬもあ
 時々の花をよめいさし
 明 時々の花をよめいさし
 花 時々の花をよめいさし
 大 時々の花をよめいさし
 和 時々の花をよめいさし
 初 時々の花をよめいさし
 二 時々の花をよめいさし
 痛 時々の花をよめいさし
 宇 時々の花をよめいさし
 津 時々の花をよめいさし
 山 時々の花をよめいさし
 瑞 時々の花をよめいさし

蒲田所 すいすいせうかたかこ都島あつこ一倒せういんせうち

新路山川 まららる新路の杉蔭板あつこけつてあつこまのの波

増田川 わいせろ程いんせうかたかこ一倒せういんせうち

早川 夜の海が波よよせの早川の波は強きいんせうち

朝明川 わかたけのあつこはつこあつこあつこあつこあつこあつこ

高井川 高井川の波はつこあつこあつこあつこあつこあつこ

川佐細川 あつこせうせうのあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

高井浦 高井浦のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

二橋浦 二橋浦のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

春のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

和国のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

あま夜来のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

不のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

田子のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

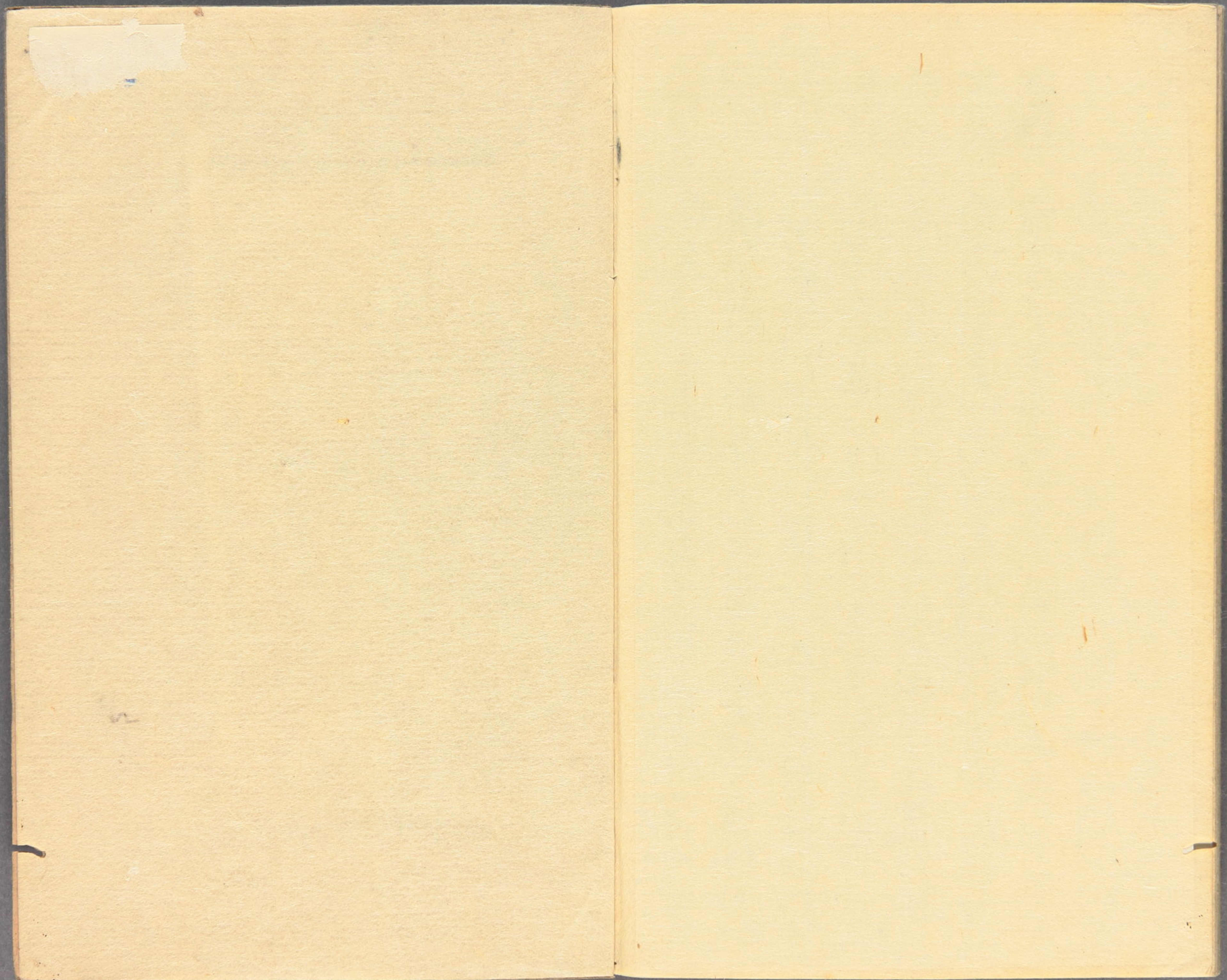
はつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

浦のあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ



宗無統

美以と友と疾く平山屋と
池の辺に氣をたれん



